特別講演

未来の医学の中の内科学の位置づけ

日野原重明

Key words : W. オスラー著「内科学の原理と実践」、私とオスラー博士との出会い、医学はサイエンスに基礎づけられたアートである

本日は伊藤貞嘉会長の司会の下に、私が日本内科学会の特別講演をさせていただく機会を与えられたことに心から感謝いたします。

私は京都大学の内科出身ですが、京大の大学院の途中で聖路加国際病院に赴任しましたので、勤務し始めてから 73 年が経ったことになります。本日は、内科学はこれからの医学の中でどういう位置づけをとればよいのかという見通しについてお話ししたいと思います。

ウィリアム・オスラー

何といってもアメリカでもっとも有名な内科医といえば、1849 年にカナダで生まれ、1919 年に亡くなったウィリアム・オスラー博士です。オスラーはカナダのマギル大学を卒業し、母校で教鞭をとった後、アメリカのペンシルベニア大学、ジョンズ・ホプキンス大学、さらに英国のオックスフォード大学での欽定教授として務めてられました。そして彼がジョンズ・ホプキンス大学の教授をしていた 43 歳のときに、自

分 1 人で内科学の教科書『内科学の原理と実践 (The Principles and Practice of Medicine)』を執筆しました。

学生を病棟に引き入れたオスラー

それまでは医学生教育は大講堂の階段教室で行っていたのですが、オスラーは教室で内科学を学生に教えることは不可能だと考え、医学生を病棟に引き込んだということでも有名です。病棟でのオスラーの診察時の図 1 がありますが、このように白衣を着ずに、聴診器は内ポケットに入れ、そして患者と目線が合う状態で診察をしています。そして、医学生やレジデントはオスラーが診察するのを実地に見て勉強したといわれています。

私とオスラーの著書との出会い

オスラーは先の『内科学の原理と実践』を 1892 年に出版したのですが、私がこの内科教科書を

聖路加国際病院

111th Scientific Meeting of the Japanese Society of Internal Medicine : Special Lecture ; Position of the internal medicine towards the future medicine.

Shigeaki Hinohara : St. Luke's International Medical Center, Japan.

本講演は、平成 26 年 4 月 12 日 (土) 東京都・東京国際フォーラムにて行われた。

図 1. 学生を病棟に引き入れたオスラー

オスラーは、医学生を講義室ではなく病棟に引き入れ、自分の診療態度を見せた。

実際に目にしたのは終戦直後のことでした。聖路加国際病院がアメリカのGHQによって接管され、アメリカの第42陸軍病院になった頃です。私たちは退去させられて小さな有床診療所で診療をつづけることになったのですが、私は接管された軍病院のメディカル・ライブラリーに特別に入れるパスをいただき、毎日の診療の後、このライブラリーでアメリカの最新医学の情報を手にしていました。そのときにオスラー著の内科のテキストブックにも出会ったのです。それまでも多くの医学書やジャーナルでは、「オスラーによると」とか、「オスラーがこうした」という文章をしばしば目にしていたので、アメリカ医学を知るためにはどうしてもオスラーについて勉強しなければならないと思ったのです。

W. オスラー著『内科学の原理と実践』の冒頭に書かれた言葉

オスラーのこのテキストブックの扉にはHippocrates(460BC~370BC)の「経験は誤りやすく、判断は難しい」という言葉が載せられています。

さて、医学についてGorgiasとAristoteles(384BC~322BC)との対話の模様をPlato(424/423BC~348/347BC)が記しているのですが、そこには、「医学は、患者の体質を考慮し、それぞれのケースに働きかけることを原理としたアートである」とあります。つまり、医学は患者の体質を考慮したうえで、一つひとつのケースに対処しなければならないというわけです。

オスラーの言葉

そして、私が本日皆さんにお話しする内科学、あるいはもっと広い医学というものは、診察の技であるという意味で“Medicine is an art based on science”といいます。この言葉はオスラーの『古き人文学と新しき科学』という講演の中にある言葉ですが、内科学を考えるときには、このアートとは何であるかを理解することなしには、広い意味の内科学を理解することはできないということを、私は皆さんにお伝えしたいと思います。

図 2. Model of Evolution of Disease and Illness

医学におけるアート

科学としての医学は、まず情報の収集 (information) から始まりますが、そのデータをどう適用するか、Art of implication (科学を患者に適用するタッチ) が医学におけるアートというように理解すればよいと思います。

疾病と病気の進化モデル

疾病と病気とは違うものだということについてお話ししたいと思います。

病気はDiseaseといますが、これは感染など様々な原因によって生じます。そして生物学的にDiseaseになった人間、つまりある疾患を持つことによって病人 (Illness) になります。その病気というものは、心理的な原因によっても起こるし、社会的な原因によっても起こります。この心理的、社会的な面と病気とは行ったり来たりの相関関係があります (図 2)。このようにDiseaseとIllnessとは区別して考えなければなりません。

表. サイエンスとアートの対象

サイエンス	アート
肉体 (身体) 疾病 法則 分析と診断	心、魂 病む人 個人的情報 コミュニケーション

図 3. 医学のゆくえ

サイエンスとアートの対象

したがって医学には、サイエンスが対象とするものと、アートが対象とするものとがあります (表)。

医学におけるサイエンスとは、身体・肉体を扱うものであり、疾病を扱うものです。サイエンスは法則を発見し、そしてそれを分析し、診断に導くものです。

一方、アートとしての医学は、肉体ではなくて心や魂、それから疾病そのものではなく、病む人の心をみます。そして病む人の個人的な情報を重視します。サイエンスである医学は分析と診断が必要ですが、アートとしての医学には患者とのコミュニケーションが非常に大切になります。

図 4. 他分野との関連

医学のゆくえ

図 3 は医学の変遷をみたものです。今のよう な進歩した医療機器や科学の発達もありません でしたから、昔の医学といえばもっぱら祈った り、手を当てたり、暖めたりするというような ものでした。それが近代化とともにサイエンス に向かっていくようになりました。つまり、病 む人を対象にした癒しのためのケアの医学が、 だんだんと疾病を対象とするようになり、治療 効果に重きをおくようになり、どれだけいのち を延ばすことができるかということばかりを考 えるようになってきました。いのちの質でなく、 どれぐらい延命させられるかということに価値 が求められるようになったのです。そして、現 代医学では Quality of Life (QOL) という観点が 見失われるようになってきました。

医学とは

私は 1951 (昭和 26) 年にアメリカのエモリー 大学に 1 年間留学しました。そのエモリー大学 の主任教授で感染症と予防医学の大家である Bee son 教授は『Textbook of Medicine』の編者でし たが、その中に、“Medicine in Modern Society” という項目をコーネル大学の Walsh McDermott 教授が次のように書いています。「医学は単なる

一つの科学ではない。しかし、これは多くの科 学に根ざし、その科学の成果を人の生命の保持 にどう適用するかを、医療を受けるものの立場 に立って、その受ける人のために、科学の手立 てをどう使うかを考え、それを実行する、修得 されたプロフェッションである」。この言葉は、 医学とは何か、医学におけるアートとは何かに ついて私が考える上で大切な根拠ともなってい るものです。

他分野との関連

さて、医学あるいは看護や保健は決して単一 の科学ではありません。それらには自然科学、 心理学、人文科学と深く関わっています。さら に詳しく見ていくと、自然科学の中でも生物学 や化学、物理学などさまざまな分野を含んでお り、心理学の部分では行動科学という大切な分 野を持ち、そして人文科学の中にも歴史学や教 育学、あるいは社会学、文学、哲学、倫理学、 宗教などがあり、それはまたそれぞれに生命倫 理や宗教などとも関連してきます (図 4)。これ らが医学や保健や看護を支えているということ を皆さんにしっかりと理解していただければと 思います。

よき臨床医とは

では、本当の臨床医とはどのような人をいう のでしょうか。私はジョンズ・ホプキンス大学 教授で、オスラーの孫弟子になる P.A. Tumulty 教授の“The Effective Clinician”という本を訳 して、『よき臨床医をめざして—全人的アプロ ーチ』と題して医学書院から出版しました。Tumulty は、よき臨床医とは「経験豊かな臨床医であれ ば、自分の言葉が患者にとっては特別な意味を もつだけでなく、患者に大きな影響も与えると いう事実をわきまえている」と述べています。 本当の臨床とは、医者話す言葉、使う言葉が

患者にとっては特別な意味をもつということから、患者に大きな意味をもつ言葉をいかに上手く使うかが重要だということになります。つまり、アートとしての医学は言葉を上手に使うこと、医者には言葉を使う技術が必要であって、患者といかにうまくコミュニケーションをとることができるかということが大切になります。プロフェッショナルの医師というのは、患者の心にタッチする言葉を使う専門家でなければなりません。これは先に紹介したPlatoも強く言っています。

The Effective Clinician

よき臨床医は、まずTender touch—患者や家族にはやわらかいソフトなタッチをすべきです。それからListen to the patient—患者の言うことによく耳を傾けることです。オスラーも、“Listen to the patient. He is telling you the diagnosis”と語っています。そして、Heartful communication—温かいコミュニケーションをマスターした人でなくてはなりません。

パレの言葉

Ambroise Paré (1510～1590) は、近代血管外科の先駆者として有名ですが、この人が残した有名な言葉を皆さんに紹介したいと思います。

“To cure sometimes.

To relieve often.

To comfort always.”

つまり、医者は治すといっても本当は時々しか治していない。本当にがんや糖尿病を治したといっても、十分には治していない。しかし、患者の感じる苦しみはしばしば軽くすることができる。ホスピスあるいは緩和ケア病棟では、死にゆく患者のいのちをどうこうすることはできないけれども、痛みや不安というような心の病は軽くすることができます。さらに病む人に

慰めを与えるということはいつでもできるので、医師はやはり患者に慰めを与えるプロの存在でなくてはならないのです。

シシリー・ソンドースの言葉

私は長い間ホスピスの仕事に携わり、日本で最初の独立型ホスピスを1993年に神奈川県の中井町に建てました。病床を25床持っており、そこにがんの末期の患者が入ってきます。

近代ホスピスは、1967年にシシリー・ソンドース医師（1918～2005）がロンドン郊外のシデナムに建てた聖クリストファー・ホスピスに始まります。

私は、ソンドース先生のホスピスを3回訪問しました。3回目の訪問は、日本で4年に1回開催される日本医学会総会の企画によるもので、私が岩波映画の依頼でシシリー・ソンドース先生にインタビューするというものでした。約1時間のインタビューをビデオに撮ったのですが、私は最後に、「ホスピスとは一言でいえるようなことなのでしょうか」という質問をしました。彼女はしばらく目をつむって考え、そして“Being with the patient—患者とともにあること”と答えました。死が迫った患者に寄り添って、手を握り、腕を軽くマッサージしたり、患者の語る言葉に耳を傾けたりして患者に寄り添うことが一番大切なことであると言われました。

最後に

René Sand (1877～1953) はヨーロッパの社会医学の先駆者です。『社会学の原理』とか『公衆衛生の原理』などの名著がありますが、彼は次のように言っています。

“Health cannot simply be given to the people. It demands their participation—国民の参与なしには、国民の健康は得られない”。

日本内科学会では、私の話を一般の方にも呼

びかけて聞いていただく機会とされましたが、医学は専門家だけでなしに一般の人にも心を寄せて、そしてその人々に参与してもらうことによってはじめて国民のHealthが実現されるのです。とくに内科学という領域は他の専門領域とは違って、多くの住民に対してこのような教育的な参加を呼びかけることが大切です。

別会場で聞いて下さった医学生 みなさん、どうか私の言葉をよく頭に入れて、よき医師を目指していただきたいと思います。こういうことを申し上げて私の講演を終わります。

著者のCOI (conflicts of interest) 開示：本論文発表内容に関連して特に申告なし